

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会
事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

平成15年度ミュージアム・ マネージメント研修会から

石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会の主催で、「博物館の集客技術と経営戦略」をテーマに平成15年10月23、24日の両日、一日目午後に基調講演と研究フォーラム、二日目午前現地見学（小樽市博物館、重要文化財旧日本郵船、小樽交通記念館）という日程で小樽市で開催された（参加者72名）。開催趣旨、講師については前号に掲載されているので、ここでは、基調講演、フォーラムの内容を紹介する。

塚原正彦先生（常磐大学）の講演「博物館園の集客技術と経営戦略」は、博物館利用者タイプの分析から、博物館と利用者の関係、集客のためのマネージメントという内容で、全国的に注目されている夕日のミュージアム（愛媛県双海町）と日本玩具博物館（兵庫県香寺町）などの成功例をまじえた論理的なお話で教えられるところが多かった。とくに、利用者減少対策として、単なるイベントによる集客では不十分であること、利用者満足してもらうためのミッションと経営戦略が求められること、博物館の利用者は単発・リピート、不満・満足指標に4つのタイプに分けられるが、他人に勧めるほど博物館の活動に満足してくれるタイプ（「伝道者」）をとらえること、「見せる場」から「学ぶ場」を基本理念に利用者を魅了し、成長させる楽習コンテンツが重要であること、利用者とのつながりでは、ピラミッド型の機構を逆ピラミッドにし、「誰もが館長、誰もが学芸員」という意識を持つこと、などの指摘である。

研究フォーラムでは、「博物館の集客実践」をテーマに、最初に子どもの豊かな遊びと文化創造の拠点施設として平成11年に開館した堺市のチルドレンズミュージアムについて、総合的なプロデュースに関わった大月ヒロ子氏（㈲トライプラス

代表取締役）から、続いて平成13年11月に常設展示を開始し調査研究や普及交流事業にも活発な活動を展開している札幌市博物館活動センターについて同館の古沢 仁氏からそれぞれ報告があり、佐々木 亨氏（北海道大学）を進行、塚原氏を助言者に討議に移った。議論は、大変刺激的なお話をしていただいた塚原先生の講演から主に引き出され、とくに、博物館の大きな味方となる「伝道者」タイプの利用者、ミュージアムエドゥケーター、「逆ピラミッド」などをめぐって参加者から活発な質問、意見が出された。利用者のタイプでは、「伝道者」の対極に「テロリスト」と名付け、博物館に不満が多く、敵対者になる利用者とする話に関連して活発な議論があったが、いずれにしても、さらにわかりやすい展示や普及活動の工夫が博物館に求められていること、「来館者が何に満足し、何に満足していないか」を分析する「経営の必要性」などを再認識する場となった。

「逆ピラミッド」の意味については、塚原先生から、博物館では利用者に現場で接している職員が重要な存在で、統計数値やアンケートでは出てこない声をくみ取るためにも館長も学芸員も利用者に接すべき、との補足説明があった。

（北海道博物館協会理事 丹治輝一）



塚原先生の講演

ニュージーランドの 日本関係資料

南半球で南島と北島から成る島国ニュージーランド。その国土面積を日本と比較すると四国を除いた程度。しかし人口規模は約400万人と北海道民よりも少ない。四国を除いた日本全土に北海道民が散って生活しているとも解することができる、極めてのどかで、のんびりとした国である。

この国の特質はキューバードのように他国では見られない特有の動植物が多いこと、それらの保護活動に起因した、環境保護の先進国であること。そして沖縄のような暖かい気候風土を持つ北島がありながら、南島には氷河があるという自然環境の豊かさにあるだろう。この豊かな自然環境の中で撮影された「ロード オブ ザ リング」、「ラスト サムライ」の好評は耳に新しい。

この国に格別な興味を持ったのは、生い立ちが北海道と良く似ていることにあった。西暦1200年以後、ポリネシア系マオリ民族の定住が南島で始まり、1800年代には、主としてイギリスによる近海捕鯨が盛んになり、捕鯨基地の建設、そして移住。1840年に先住民マオリ民族とのワイタンギ条約でニュージーランドはイギリス領となり、1847年独立、イギリス連邦に属し今日に至る。ニュージーランドは先住民マオリとイギリスを主体とした移民の共存国家であり、歴史的な流れは北海道のそれと良く似ている。

1990年、この国に残されている日本関係資料調査の話が舞い込んできた。予備調査をかねて各地の博物館、美術館、大学等を訪ねると、前述したように建国150年余りの国でありながら日本関係資料は意外なほど多いことに驚かされた。その背景を探ってみると、その理由は日本の側にあった。

1854年（安政元年）、江戸幕府はペリー艦隊の来航を受け、3月にアメリカと、8月にイギリスと相次いで和親条約を締結する。そして1868年（明治元年）、明治新政府誕生と共に日本は、欧米諸国の技術支援を得ながら近代化を加速させる。その原動力となった一群にイギリス人技術者集団がいた。彼らの足跡で知られるのは、1872年（明治5年）に開通させた新橋・横浜間の鉄道だろう。彼らの技術力をもって開通させた我が国最初の鉄道は、当然イギリス式。[その8年後、1880年（明治13年）に開通する北海道最初の鉄道はアメリカ式。

東京ではすでにイギリス人技師に養成された日本人の鉄道技術者が育っていたにもかかわらず、北海道の鉄道建設に出向いてきた記録はないことから、当時の英米関係が計り知れる。]そうした日本の近代化に貢献したイギリス人技師や科学者が日本での任期を終え、帰国する折に雇用主などからお礼の意をこめて贈られる物品、あるいは個々人の興味によって買い求められた物品が、日本資料としてイギリスに渡り、そこから移民と共にニュージーランドへ移動している。それがニュージーランド国内に残る日本関係資料の主体をなしていた。

日本関係資料の内容は、浮世絵、日本刀、槍、鎧、冑、根付、印籠、陶磁器、漆器、象牙細工、古写真等、多岐にわたるが、資料の年代は江戸後期から明治にかけてのものが主体となっている。明治期に日本に来た外国人にとって、日本の何に興味を示したかを知る上で、とても興味深い資料が多い。中でも古写真は、いわゆる横浜写真と言われるもので、主に外国人向けに作られたモノクロ写真を人工着色したカラー写真。50枚綴りが多く、装丁に漆や象牙、螺鈿細工を施したものが好まれた。被写体は東京、京都、横浜、神戸、日光など、寺社仏閣を含む風景が多いが、中には生活風俗をとらえた物や、購入者自らがモデルとなって撮影させたものもある。浮世絵なども、そうした社会背景があるため、幕末期のものが多くの特徴と言えよう。

ニュージーランドの主要な博物館は北島から旧日本軍のゼロ戦展示で知られるオークランド博物館（オークランド）、植物や昆虫が密封された琥珀コレクションで知られるカウリ博物館（マタコヘ）、最も新しい国立博物館のテバパ（ウェリントン）、南島ではガーデニングモデル都市として有名なクライストチャーチにあるクライストチャーチ博物館、伝統を有するオタゴ博物館（ダニーデン）などがあげられる。それら博物館で日本関係コレクションを見ていくと、質量ともに南島に多いことが判る。早くから欧人の移住が進み、それに伴うコレクションの移動であったことを裏付ける。

明治初期、太平洋からインド洋を経てイギリスに渡り、そして再び南半球のニュージーランドに旅立った日本関係のコレクション。2005年秋には、それらを一堂に会する展示会の開催が南島のダニーデンで予定されている。

（小樽市博物館長 土屋周三）



ミュージアム・マネージメント 研修会を終えて

平成15年度、石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会（通称：道央ブロック）は、北海道博物館協会の「平成15年度ミュージアム・マネージメント研修会」（平成15年10月23～24日開催）を主催しました。

会場は、小樽市の運河沿いに位置するホテル・ノルド。事務局は、小樽市博物館と北海道開拓の村の協同で受け持ち、企画立案、講師の折衝、会場等の手配などその多くを小樽市博物館の土屋館長が中心に引き受けてくださり、北海道教育委員会と道博協からの補助金等の手続き、通信など事務的な面を開拓の村が行うといったかたちで、体制づくりをしました。昨年の2月から準備を始め、実施、後始末など全てが終了したのは、今年の1月末のこと。小樽と札幌、何度も行き来し、やっと終わった、といった感想が現在の率直なところでは。

研修会当日は、72名の皆様にご参加いただき、用意した会場が埋め尽くされ（少々狭かったのかも知れませんが）、実践にもとづいた講師の方々による発表と、講師と会場の皆様とのパネルディスカッションでは熱のこもったやりとりがあり、事務局の一人として嬉しく思いました。そして、北海道にいながらにして、中央の空気を感じる良き機会に恵まれたと思っています。



研修会2日目のエクスカーショより

さて、大きな事業をかかえた平成15年度はまもなく終わり、「道央ブロック」の平成16年度は？何か、変化をもたせたいと、ただいま検討中です。

（道央ブロック事務局員・北海道開拓の村
学芸員 黒川 郁）



平成15年度後期の 道南の動きについて

10月以降の道南ブロックの各施設では、特別展やミュージアム・コンサートを始めとして講座・講演などの館独自の普及活動事業のほか、学校における社会科の授業や総合的な学習に対する学習支援活動などが行われていました。そのなかでも目に引いたものをご紹介します。

平成14年10月に閉館した福島町の道立青函トンネル記念館が11月28日までの予定で9月から解体工事をおこないました。明けて2月10日までに新しい「町立青函トンネル記念館」建設の基本構想がまとまりました。それによるとトンネルを連想させるカマボコ型の建物が2棟並び、1棟に青函トンネルのことがすべてわかる常設展示を、もう1棟にはシアターと多目的ホールを設け、町内の特産品の販売コーナーを準備する計画とのこと。平成16年度に着工し、平成17年度のゴールデンウィークに開館を予定しています。「横綱の里福島町」を代表する「横綱記念館」とともに「青函トンネル工事の町福島」を代表する施設として開館が待たれます。

11月30日（日）には、箱館戦争にかかわる施設として知られる「史蹟館」を管理している五稜郭タワー株式会社の五稜郭タワー創業40周年記念事業の一環として制作した「土方歳三ブロンズ像」の完成と建立を記念するとともに函館の歴史に深くかかわる土方の存在をとおして函館と五稜郭の歴史を改めて考えることを目的として第17回函館文化発見企画「土方像完成記念フォーラム」が午後3時から五稜郭タワー2階ホールで開催されました。「ご先祖様としての土方歳三」と題して土方陽子館長（土方歳三資料館）の基調講演のあと、栗塚旭氏がコーディネーターになって作家の萩尾農氏と土方歳三ブロンズ像を制作した小寺真知子氏そして土方陽子氏がパネリストになって「幕末ヒーローの魅力ーそれぞれの土方歳三ー」をテーマにシンポジウムが行われました。200名分用意されたイスでは足りず立ち見ができるほどの盛況でした。

新年度も各施設では、乏しい予算の中でやりくりして意欲的に博物館事業の展開をはかるようです。しかし、予算の縮小だけではなく市町村合併も佳境に入る年度でもあり、会員の確保やブロックの存続の問題を考える年度になりそうです。

（知内町郷土資料館 学芸員 高橋豊彦）

道北地区
News

地域特性を取り入れた 地元小学校との取り組み

稚内に程近い中川町に一昨年オープンした中川町エコミュージアムセンターは、日本最大のクビナガリュウ復元骨格や多くのアンモナイトをはじめとした展示によって中川町の成り立ちや魅力を紹介する自然誌博物館と宿泊もできる体験・研修棟からなる自然誌博物館／宿泊型体験・研修複合施設です。

当センターでは、地元の小学校などと連携して、化石などの地域特性を取り入れた体験学習活動の取り組みを展開しています。そんな中、すぐそばにある佐久小学校の子どもたちと総合的な学習の時間を活用して「恐竜の木製パズルづくり」に取り組みました。40個ほどのバラバラになった骨の部品を組みあわせてティラノサウルスを完成させるのですが、組み立ての説明書はありません。あるのは「恐竜発掘サイトマップ」という、骨の形と組みあわせる番号だけが書かれた1枚の手がかりだけです。子どもたちは2班に分かれて、骨

の形をじっくり観察し、全体の様子を想像しながら、力を合わせて組み立てていきました。完成した2体のティラノサウルスのポーズの違いに隠された恐竜研究の歴史や、生態復元模型の観察と恐竜の食性に関するクイズなどを通して、恐竜の特徴や骨格からわかる生態など、化石研究の方法や成果の紹介という「化石の町」にちなんだ学習活動につなげていきました。

恐竜のことを学んだ子どもたちが将来町内から見つかるかもしれない恐竜化石を身近な博物館で見ることができ、化石や地層の研究者がうまれることを期待しています。

(中川町エコミュージアムセンター
研究員 松田敏孝)



完成した2体のティラノサウルスと記念撮影

日胆地区
News

日胆地区博物館等 連絡協議会の動き～来年は何を？

平成15年度日胆地区博物館等連絡協議会拡大役員会・館長会議が、1月27日に門別町図書館郷土資料館で行なわれました。次年度の事業計画について、以下のような協議が、なごやかかつ活発な雰囲気で行なわれました。

(1)総会は5月末～6月初めに日高町にて開催予定です。会議のあり方について、「総会と役員会を合わせて実施しよう」「せっかく遠方から集まるのだから、充実した研修を行なわないか」との意見が出されました。会議形式を変えると出席が難しくなるパターンも考えられるため、事務局サイドでさらに検討を加えることになりました。

(2)博物館職員研修会は9月に静内町で開催の予定です。昨年秋の研修会は自炊できる施設を利用した一泊行程で、内容が濃い上に安く上がったたいへん好評でした。次回も同じ形式で意見が一致しました。

(3)顔写真もつけた職員人名録の作成が提案され

ました。「館の様子がわかる博物館マップにしたらいいかも？」という賛成論と、「人材バンクなどはあまり活用されていないのが現状では」「業者作成の名簿がすでにある」との懐疑論が出されたため、今後さらに検討・試行が続けられます。

(4)イオル構想・整備に、今後も協議会として協力していくことが確認されました。

などを中心に話し合われました。

なお個人的には、なかなか集まることのできない距離を心理的に縮める「何か」がないか、思案しています。

(日高山脈館 学芸員 小野昌子)



拡大役員会・館長会議の様子

道東3管内
News

大正3遺跡の爪形文土器

帯広市街地の南東十五kmほどの、十勝川の支流途別川の右岸段丘上には縄文時代早期～前期の遺跡八カ所が分布しており、大正遺跡群と呼んでいます。この遺跡群は平成十四年度から高規格道路建設に伴う発掘調査が行われており、十五年度に実施した大正3遺跡の調査で、縄文時代草創期に位置する可能性が高い「爪形文土器」とこれに伴うと考えられる多数の石器類が出土しました。

この遺跡で発見された爪形文土器は、従来縄文時代の土器が発見される地層よりも下の地層から発見されたため、層位的にも古い時期のものであることが確認されました。

土器の表面には「爪」または「爪形の工具」を器面に突き刺したり押し付けたりして付けられた文様に特徴があります。また、土器の底には「乳房状」の突起が付けられています。乳房状の突起は、縄文時代早期以前の列島各地の土器に見られる特徴ですが、道東部ではこれまで未発見でした。



大正3遺跡の爪形文土器

この形がなぜ以降の土器に引き継がれていないのか、その解明がそのまま土器出現期の北海道の解明に直結しているかもしれません。

調査で出土した数多くの資料の本格的な整理作業や、年代測定をはじめとするさまざまな分析は、十六年度以降に取り組む予定となっています。この土器の出土が、北海道における土器出現期の様相を解き明かす「鍵」となるものと心して、今後の作業に取り組んでいこうと考えています。

(百年記念館企画展「若葉の森と大正遺跡展」パンフレットより)

(帯広百年記念館 学芸員 北沢 実)

網走管内
News網走管内博物館連絡協議会
平成15年度個別研修会(紋別)

平成15年11月14日(金)に紋別市立博物館で網走管内博物館連絡協議会個別研修会が行われた。参加人数は一般参加や博物館関係者を含め16名が集まった。

江戸時代末のオホーツク海沿岸の様子を考えることによって、この地方の成り立ちを考え、網走管内博物館等職員の研修を深めるとともに、生涯学習における博物館機能の向上を図るという趣旨のもと、道都大学教授の小川昭一郎氏を講師に迎え「幕末の蝦夷地オホーツクの沿岸を歩く」の講演と、意見交換、施設見学などを行った。

講演には、当時を知る為の資料に松浦武四郎の『蝦夷日誌』や『紋別御用所日誌』、『組頭井上元七郎廻浦中諸書付』等を用いて進められた。当時の人々のオホーツク沿岸を移動する際に所持した保存食や、腰の高さより深い水の量でなければ橋がかかっていなかった川の様子、難所に苦労しながら岩の道を歩いていた人々、酒の流通する方向から酒の等級や名前がわかることなどを知り、江

戸時代のオホーツク沿岸を行動範囲とした当時の様子を文献の中から感じ取ることができた。

その後意見交換が行われ、その中で「諸学校への取り組みについて」や、「野外活動」「実技」などについて各館での対応や意見が出され、今後の博物館についての問題点を話し合った。

最後に紋別市立博物館の常設展示や収蔵展示、特別展「室町から江戸時代の美～日本刀と屏風」を佐藤学芸員の解説で見て周り、館の運営や内容について話し合われ、研修は終了した。

(紋別市立博物館 学芸員 秋山 朋子)



講演「幕末の蝦夷地オホーツクの沿岸を歩く」の様子



情報・話題・動き

北海道博物館協会学芸職員部会25周年記念誌『出会い・発見・情報発信の拠点・北の博物館』は利尻町立博物館の西谷さん、北海道開拓記念館の舟山さんの精力的な取り組みにより編集の最終段階に入りました。寄せられた原稿は62編、その土地にあって、その土地の人たちとの出会い、施設のあり方や組織のあり方への提言、研究への方向性など博物館が地域に役立つ施設であり続けるためのそれぞれの想いがつづられた内容になっています。部会発足に直接かかわった方、部会の運営、活動に活力を与え基盤を創られた方たちから寄せられた文面から、私たちが今置かれている立場、処遇、そして取り巻く環境は以前にも増して厳しいものになっていることが強く感じられます。だからこそ、各地で地味ながらも地域に役に立つ活動を行っている会員たちがしたためた、この25周年記念誌が会員だけに配付されることなく多く

の人たちの目に触れて欲しいものです。

昨年根室市で開催された役員会で今後見直しを含めて検討することとして、(1)部会規約の整理、(2)新会員名簿の作成、(3)今後の研修会のあり方、(4)部会の役割等々が取り上げられました。役員会にそれぞれの小委員会を設け、在任中に目途をつけることとなりました。とくに、部会の役割、研修会のあり方については会員相互の意見交換が必要となるため、小委員会で課題を整理した上で議論の場を設けたいと考えております。

平成16年度学芸職員研修会について

開催地 空知管内芦別市

開催日 平成16年6月24日(木)～25日(金)

役員会は23日(水)

テーマ 『地域学のススメ』

内容については調整中

この予定で取り進めています。

平成17年度以降の研修会開催地として、道南の江差町、胆振の白老町が候補地として上がっております。

(学芸職員部会 矢吹俊男)



平成17年7月オープン予定 (仮称)旭川市青少年科学館 プラネタリウムと天文台も併設

(仮称)旭川市青少年科学館は、現在の常磐公園からJR旭川駅周辺の「北彩都あさひかわ」シビックコア地区に移転・新築され、平成17年7月にオープンする予定です。

新しい科学館では、「ふしぎから始まる〈科学〉との出会い」をコンセプトとし、「北国」「地球」「宇宙」をテーマとした様々な体験型の展示機器およそ50点を設置します。ミックスド・リアリティやモーション・キャプチャーなど最先端技術を取り入れた、「北国の動物はなぜ大きくなるか」「人類の進化」「虫の眼から見た自然」「氷河期と海面変位」といった全国でも初めての独創的な展示もあります。常設展示の導入部では、250インチの迫力ある3Dハイビジョン映像により、来館者を「ふしぎ探しの旅」へと誘います。

また、全天周ドーム映像を備えたドイツのカール・ツァイス社製の最新式プラネタリウムを導入し、口径65センチ反射式望遠鏡、口径20センチ屈折式望遠を備えた2基の天文台を併設するほか、マイナス30℃になる低温実験室など、いろいろ

な視点でふしぎを再発見し、楽しみながら科学を学ぶことができます。

建物は、子供から高齢者、ハンディキャップを持つ方まで、だれもが利用しやすいようユニバーサルデザインの考え方を取り入れるほか、環境負荷が少ない雪冷房システムを導入するなど、人や環境にやさしいつくりとなります。

また、地域の自然生態系を復元し、自然観察や野外活動に活用する自然観察空間を市民の皆さんと協力しながら造成します。

新しい科学館の運営には、ボランティアの皆さんに御参画いただき、市民との協働による「開かれた科学館」づくりを目指していきます。

(旭川市青少年科学館長 佐々木恵一)



プラネタリウムドームが外から観望できる外観

国指定史跡フゴッペ洞窟

＜発見と保存＞

フゴッペ洞窟は1950年（昭和25）に発見され、小樽市手宮洞窟と並び続縄文時代の岩面刻画のある洞窟遺跡として公開、保存されてきました。

発見の翌51年から開始された、北大名取助教授を団長とした調査団による発掘調査の結果、続縄文時代の精神文化や生活を探る上で重要な遺跡とされ、1953年（昭和28）に国指定史跡となりました。洞窟内部の岩面刻画は約800点にもおよび、人物像や動物、舟などが描かれています。

史跡指定後は、木造の覆屋が設けられましたが、刻画の劣化が問題視され、1968年（昭和43）には最初の保存調査が開始、1972年（昭和47）には、洞窟を覆い空調機能を完備した日本最初のカプセル方式による保存施設が完成しました。

永久保存を目指した施設でしたが、昭和50年代には壁面が緑色になり、水の侵入、空調の機能低下などが徐々に進み、施設の老朽化が深刻な問題となりました。

＜新たな保存調査事業＞

1998年（平成9）から、北大低温科学研究所の福田教授を委員長とするフゴッペ洞窟保存調査委員会が発足、1968年（昭和43）以来、2度目の保存調査事業が開始されました。

また前回の保存調査時と同様に、周辺の発掘調査も行なわれ、続縄文～擦文文化の遺物・遺構が発見されました。

3年間の基礎調査の結果から、今回も内部環境数値の目標値を設定しました。洞窟内部の温度は前回の保存事業での設定数値と同様に10℃（±5℃）、見学用スペースのカプセル内温度は18℃程度を目指しています。また断熱壁に改修することで洞窟の急激な温湿度変化を避け、照明方法は人感センサーによる点灯方式を用い、白色ダイオード光と蛍光灯を採用しました（管理用光源はハロゲン光）。

これらの保存調査とは別に、文部科学省科学研究費補助金による、北海道開拓記念館を中心とした地域連携推進研究「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」と、鳴門教育大学小川助教授による「フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究」によって、国内外の野外調査、シンポジウムやセミナーの開催、フゴッペ洞窟刻画の再検討、資料の収集・蓄積な

どが進み、ソフト面の充実がはかられました。これらの成果は、新保存施設の展示や運営に活かされることとなりました。

＜展示について＞

新たな施設は展示ガイダンス施設の面積を増やし、明るさを段階的に減じてカプセルへつながる照明・導線計画としました。

展示は「洞窟を利用した人々」、「よみがえる岩面刻画」、「世界の岩面刻画」と3つの大きなテーマにより構成し、過去の調査によって発見された遺物のほか、鉄製品の再現資料、2002年度（平成14年）調査時の資料、洞窟奥壁を再現した原寸大レプリカ、保存処理により展示が可能となった岩面刻画片、3世紀ころのフゴッペ洞窟周辺における人びとの生活を想定復元した1/50サイズのジオラマなどを展示します。

これらの展示計画の中心に、カプセルから観察する刻画がありますが、新カプセルは一部天井面を含め全面ガラス張りとなり、洞窟全体の形状を俯瞰することが可能となりました。これにより刻画の持つ迫力を実感できるものと思います。

公開と保存を両立させるために、考え得る最善の手法を探ろうとした今回の保存調査事業でしたが、刻画の劣化速度を抑えることしかできないと考えています。今後も、モニタリングを継続し、細心の注意を払い続けていかなければなりません。

次代に受け継ぐために皆様方のご指導、ご協力を仰ぎながら運営していきたいと考えています。

皆様のおこしをお待ち申し上げます。

（余市町教育委員会 学芸員 浅野敏昭）

〒046-0001 余市町栄町87

TEL (0135) 22-6170

お問い合わせは余市水産博物館へ（22-6187）

休館日 毎月曜日、祝祭日の翌日、年末年始

入館料 大人¥200 小中学生¥100

団体割引 20名以上（大人¥160 小中学生¥80）



新保存施設の鳥瞰図

事務局日誌

平成15年

- 10月7日・ミュージアムマネジメント研修会へ補助金送付
 10月12日・第43回北海道博物館大会に係る関係書類提出
 10月17日・道北地区博物館等連絡協議会へ助成金送付
 10月23日・第2回役員会開催（小樽市）
 10月27日・（株）北日本ココヨ退会（賛助会員）
 10月28日・平成16年度表彰申請関係書類の発送
 10月29日・網走管内博物館連絡協議会へ助成金送付
 11月30日・登別市郷土資料館より表彰候補者として同館ボランティアグループS L Gを申請
 12月12日・スガノ農機（株）、道北地区博物館等連絡協議会より表彰候補者として、世界のブラウと土の博物館土の館館長 穂吉忠彦氏を申請
 12月20日・北海道立帯広美術館より表彰候補者として同館ボランティア しらかばの会を申請
 12月25日・小樽市博物館より表彰候補者として同館友の会 新倉加都子氏を申請
 12月30日・ひがし大雪博物館より表彰候補者として同館友の会を申請

平成16年

- 1月14日・浜頓別町郷土資料館・苫前町郷土資料館・江差追分分館より年度末をもって退会との申し出（団体会員）
 1月15日・日胆地区博物館等連絡協議会へ助成金送付
 1月20日・天塩川歴史資料館（団体会員）、椿三佐幹氏（個人会員）より年度末をもって退会との申し出
 2月3日・平成16年度北海道博物館協会表彰へ申請のあった5件の関係書類を表彰担当役員に送付（後日電話にて表彰の可否を確認）
 2月13日・平成16年度の主な展示会及び普及事業計画の調査用紙発送
 2月13日・第80号道博協ニュース原稿執筆依頼
 2月13日・第3回役員会の開催通知を送付
 2月20日・北海道家庭学校博物館より年度末をもって退会との申し出（団体会員）
 2月25日・道南ブロック博物館施設等連絡協議会・道東3管内博物館施設等連絡協議会・北海道美術館学芸員研究協議会へ助成金送付
 3月3日・日本動物園・水族館協会北海道ブロックへ助成金送付
 3月9日・本別町歴史民俗資料館・北海道立文書館より年度末をもって退会との申し出（団体会員）
 3月10日・北海道青少年科学館連絡協議会へ助成金送付
 3月12日・第80号道博協ニュースを発送
 3月12日・北海道博物館協会学芸職員部会へ助成金送付
 3月16日・かみすながわ炭鉱館より年度末をもって退会との申し出（団体会員）
 3月26日・第80号道博協ニュース・北海道博物館協会会員証（2004年4月1日～2006年3月31日）の発送
 3月26日・第3回役員会開催（札幌市）

新入会員・退会会員

平成15年度次の会員が入会されました。

- 団体会員 余市宇宙記念館（余市町）
 個人会員 笠巻袈裟男氏（穂別町）・久野幸江氏（生田原町）
 賛助会員 バル・コーポレーション（江別市）

平成15年度次の会員が退会されました。

- 団体会員 戸井町郷土館・（財）オホーツク水族館・優佳良織工芸館・札幌市円山動物園協会・天塩川歴史資料館・江差追分分館・苫前町郷土資料館・浜頓別町郷土資料館・北海道家庭学校博物館・本別町歴史民俗資料館・北海道立文書館・小さな貝の博物館・かみすながわ炭鉱館
 個人会員 松村宗作氏・椿三佐幹氏・内山善博氏
 賛助会員 （株）北日本ココヨ

役員異動

人事異動・役員改選等により、次のとおり役員の変更がありました。

- 副会長 井川 弘氏（北海道立近代美術館 副館長）
 " 土屋 周三氏（小樽市博物館 館長）
 理事 岡田 啓一氏（余市宇宙記念館 館長）
 " 長崎 潤一氏（札幌国際大学 助教授）
 " 山田 健氏（北海道開拓の村 学芸課長）
 監事 佐藤 一夫氏（苫小牧市勇武津資料館 館長）

事務局からのお知らせ

平成16年度北海道博物館大会は平成16年7月8日、9日の両日、帯広市の北海道ホテルを会場として開催することになりました。大会テーマ、シンポジウム等につきましては只今検討中ですが、詳しくは「道博協ニュース」第81号でお知らせします。数多くの参加をお願いいたします。

会費納入のお願い

多くの会員からは平成15年度の会費を納入していただいております。しかし、平成14年度及び平成15年度の会費をまだ納入されていない会員がおられます。北海道博物館協会の事業は会員から納入されます会費で運営しておりますので速やかな納入をお願いいたします。

主な展示会及び普及事業に関する調査についての協力をお願い

平成16年度の各館・園の主な展示会と普及事業に関する調査を行います。各館・園に調査票をお送りしておりますので、皆さまのご協力をお願いいたします。